北海道夕張市における子どもの読書環境の現状と課題

野口久美子（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科）
kuas@slis.tsukuba.ac.jp
野口武悟（専修大学文学部）
takenori@isc.senshu-u.ac.jp

1　研究の背景と目的

北海道夕張市は2007年3月に財政再建団体となり，多くの公共施設が廃止された。図書館もその中の一つである。市立図書館は2006年度末をもって閉館し，代わりに約2万冊の蔵書を有する図書コーナーが市の中央部にある保健福祉センター内に設置された。財政破綻後の夕張市の図書館サービスの現状については，図書コーナーに唯一配属された職員であり，司書歴20年余りの平井由美子氏の報告[1]，図書コーナーや市内の学校を対象に図書の支援や運営相談を行っている北海道立図書館の鈴木浩一氏の報告[2]がある。しかし，子どもの読書環境を考えるとき，公共図書館（夕張の場合は図書コーナー）によるサービスだけではなく，学校図書館，幼稚園，保育所，書店の現状などにも注目する必要がある。特に，児童が生活の大半を過ごす学校内にあり，直接足を運べる学校図書館は重要であると考えられる。

筆者らは，夕張市における子どもの読書環境の現状と課題を把握することを目的に，2008年3月4日から6日にかけて，夕張市図書コーナー（以下，図書コーナーとする），市内の学校図書館（夕張市立清水沢小学校，以下，清水沢小学校とする），北海道立図書館市町村支援課（以下，道立図書館とする）を訪問し，関係者に聞き取り調査を行った。表は，主な調査項目を示したものである。

本稿では，図書コーナーや市内の学校図書館でどのような活動が行われ，道立図書館が市内の学校に対してどのような支援を行ってきたかを検討し，その結果に基づき，今後，夕張市において子どもの読書環境を充実していこうとする際に考えられる課題と解決の方途を考察する。

訪問先（聞き取り対象者）	主な調査項目
①夕張市図書コーナー（嘱託職員・平井由美子氏）	開館状況，蔵書数，予算，運営体制，サービス内容，市内外からの支援の状況，課題など
②夕張市立清水沢小学校（校長・順毛誠一氏）	開館状況，蔵書数，予算，運営体制，学校内の読書活動の方針，児童の読書活動の状況，これまでに道立図書館から受けた学校支援の内容，課題など
③北海道立図書館（市町村支援課長・鈴木浩一氏）	図書コーナーへの支援内容とこれまでの経緯，夕張市内の学校への支援内容，課題など

2　夕張市における子どもの読書環境の概要

2.1　夕張市の概要

夕張市は北海道のほぼ中央に位置し，山や丘陵に囲まれている。面積が広く（34.7km^2），かつ南北が広がっているのが特徴である。公共交通機関は必ずしも十分ではない。炭鉱の街として栄えた最盛期（1960年代頃）には約12万人が居住していた。

炭鉱閉山後は，観光やメロン栽培を中心に街おこしを狙ったが，人口流出，雇用の創生にはつながらず，市の財政悪化は深刻となった。2006年11月には夕張市財政再建の基本的枠組み案[3]が市民に向けて発表され，2007年3月6

日に財政再建団体となった[4]。2008年3月末の人口は約1万2000人である[5]。

2.2　旧図書館の状況

旧図書館（市立夕張図書館）は市役所がある市内北部に位置している。約6万冊の蔵書を有し，職員は4名で運営にあたっていた（兼任図書館長を含む）。2008年3月現在，旧図書館は雨漏りの状態が酷く，建物自体が使用不可となっている。

2.3　市内の学校，書店，幼稚園，保育所などの状況

2007年度の市立学校数は，小学校が7校，中学校が4校である。夕張市財政再建計画とその後の検討の結果，最終的に小学校，中学校がそれぞれ1校に統合されることになった[6]。市内には他に，道立の高等学校が1校，高等養護学校が1校ある。

市内には文具店を兼ねている書店が2軒あり，本の注文を受け付けている。幼稚園や保育所でも絵本を所蔵しており，職員が図書コーナーに本を探しに来ることもある。児童館や地域文庫などはないが，財政破綻後に発足した読み聞かせのボランティアサークル，子どもの読書活動を支援する団体が活動している（後述）。

3　図書コーナーの活動

図書コーナーは火曜日から土曜日（祝祭日，年末年始を除く）を開館日とし，一人10冊2週間の図書貸出を行っている。図書コーナーの蔵書は，保健福祉センター1階の3つのスペースに分散配置されている。一番広いスペースには，一般書，児童書，郷土資料が置かれ，貸出やレファレンス業務などを行うカウンターがある。その他に，調べ学習室，文庫本や新聞・雑誌を配置しているスペースがある。調べ学習室には事典類や児童生徒が調べ学習に使える図書を配架し，調べ物ができる会議用の長机とパイプ椅子が用意されている。

2008年2月末現在の蔵書20,882冊のうち，児童図書として分類されているのは5,287冊である。2007年度図書費はゼロであったが，寄贈により1,165冊の新着図書を受け入れた。この中には，新聞社や出版社から寄贈を受けた紙芝居，しかけ絵本なども含まれている。

図書コーナー開設後は，子ども（幼児，小・中学生）の利用が増えた。旧図書館時代には月平均22日開館し，貸出利用者は一月5～25人程度であった。他方，図書コーナー開設以後は月平均20日開館し，約30～100人の貸出利用があった。図書コーナー開設後に貸出利用が増えた要因としては，図書コーナーのある周辺地域の人口比率が他の地域に比べて高いこと，近隣に公営住宅があり，そこに住む小学生がよく利用していることが挙げられる。

図書コーナーでは，閲覧，貸出，レファレンスの基本的なサービスの他，一才半検診時に母親に対して，読み聞かせの啓蒙や読み聞かせに適した絵本の紹介を行っている。ボランティアとしては，読み聞かせボランティアサークル「ひなたBOOK✿（ぼっこ）」が2007年度に発足し，活動を行っている。「ひなたBOOK✿」の読み聞かせは，図書コーナー（月2回午前中，保健福祉センター2階を利用，幼児向け）の他，学童保育，小学校，幼稚園，保育所でも行われている（夏休み，冬休み，その他不定期）。その他，子どもの読書活動や文化活動を支援する団体「子ども文化の会ーかぜちゃるー」が，読売新聞社からの助成金による絵本作家の講演会や人形劇，お話会，語りの会などを行っている。

図書コーナー職員・平井由美子氏によると，小・中学校が1校ずつに統合された後の構想として，廃校になった学校の教室に旧図書館の蔵書などを配置し，活用することを考えているという。図書コーナーとしては，学校との協力体制を確立した上で，旧図書館の蔵書を活用した学校支援を行い，子どもの読書環境を少しでもより良いものにしたいという考えを持っている。

4　学校図書館の運営と読書活動

4.1　清水沢小学校

今回訪問した清水沢小学校は，市の中央部に位置し，児童数137名，教員数14名，学級数9（うち普通学級 6，特別支援学級 3）で構成されている（2008年3月現在）。

学校図書館の広さはおおよそ教室2つ分，蔵書数は1,635冊である。貸出冊数の集計は行われていなかったが，低学年の利用が割合多いようである。図書の購入に使える予算は計上されておらず，学校予算全体から捻出している。筆者らは今回，学校図書館の見学を行ったが，蔵書は児童書（文学）を中心に構成されており，新着図書コーナーに 70 冊ほどの本が別置されている他は，比較的古い本が多いという印象を受けた。調べ学習や児童の興味関心に対応するのに必要な図書（特に社会科学，自然科学などの分野）については，必ずしも配慮が行き届いているとはいえない状況であった。

学校図書館の運営については，校務分掌によって，教員1名が担当している。司書教諭，学校司書は配置されていない。ボランティアなどの体制も現在は整っていない。図書館は常時開館としているが，担当者が常駐しているわけではない。したがって，実質的な開館時間は，児童図書委員が貸出などを行う昼休み，2〜3時間目の間の休み時間，放課後となっている。児童図書委員会は，学校図書館担当の教員の指導のもと，図書の貸出や書架整理などを行っている。学校全体での読書活動は行っていないが，夏休みや冬休みに読む冊数の目標を決めさせているため，その時には学校図書館が利用されている。

清水沢小学校の児童にとっては，学校図書館がほぼ唯一の読書材の入手先である。清水沢小学校と図書コーナーは，車で約 10 分の距離にあり，児童が一人で図書コーナーに通うことはできない。清水沢小学校長である順毛誠一氏自身も学校図書館が重要である，今後は図書コーナーとも連携していきたいとの考えを持っている。ただし，教員は担任や教科などの仕事を兼務しながら，学校図書館の運営に携わっている。そのため，仕事の優先度はどうしても3番手になってしまうのが現状のようであった。

なお，小学校が1校に統廃合された際は，清水沢小学校が統合先となる予定である。廃校になる学校の図書については，ゆくゆくは図書コーナーと協議しながら，整理していくことになるのではないかとのことであった。

4.2　道立図書館による学校支援

道立図書館では，市立夕張図書館の廃止計画が持ち上がった2006年末から2007年にかけて，夕張市と協議し，市内の学校に対して，読書活動，学校図書館活動への支援（以下，学校支援とする）を行うことになった。

初めての学校支援は2007年2月下旬に3つの小学校で行われた。内容は，児童書の新刊約2,000冊，しかけ絵本約150冊の展示・貸出，道立図書館の職員と札幌在住のボランティアによる読み聞かせである。道立図書館の蔵書を直接学校へ運び，児童は自由に本を手に取って読んだり，借りる本を選んだりすることができた。実際に貸し出したのは約910冊である。

一度に大量の本に触れることができる企画は好評のうちに終わり，2 回目の学校支援はすべての小学校（7校）で2007年7月に行われた。その際には，約2,500冊の本を運び，全体で約1,300 冊の貸出があった。道立図書館側では貸出冊数の制限をしなかったため，一人で 18 冊借りた児童もいた。当日は「ひなたBOOK✿」のメンバーが読み聞かせを行った。

ある学校では，次のようなやり取りも見られた。児童から読みたい本のリクエストが寄せられたのである。児童のリクエストは児童文学の名作であり，道立図書館から運んだ本は児童書の新刊が中心であったため，そのリクエストに応えることはできなかった。しかし，児童がリクエストした本は図書コーナーで所蔵していたため，後日，図書コーナーから児童へ手渡すことになった。普段はなかなか触れることのでき

ない大量の本を目にして，児童の読書意欲は否応なく高まったと考えられる。図書コーナーが機能していたからこそ，「あの本が読みたい」という児童の読書意欲の芽を潰さずに済んだ。道立図書館による学校支援は，児童に読書環境を提供しただけではなく，結果として，学校と図書コーナーが結びつくきっかけとなった。

5　考察

夕張市では，予算はつかないものの，司書歴20 年余りの職員のいる図書コーナーを開設することができた。このことは，市民の最低限の読書環境と生涯学習の場がギリギリのところで保たれたという重要な意味を持っている。しかし，図書コーナー内のサービスは，市内のすべての子どもには行き届かない。子どもに最低限の読書環境と学びに必要な情報を保障することは重要な課題である。

図書コーナーや書店に通うことができない児童生徒にとって，学校図書館は読書意欲や学びのための手立てを保障する生命線である。学校図書館を真の意味で生かしていくためには，今まで以上に図書コーナーと学校とがより緊密に連携していくことが求められる。蔵書面に関していえば，旧図書館の蔵書などを学校図書館に転用するなど，可能な限り，学校教育と社会教育の枠を越えて，一体的な運営を考えていくことも必要になると思われる。

ただし，図書コーナーは学校への支援，児童サービスだけに集中するわけにはいかない。全人口の 4 割を占める高齢者を含む，一般市民へのサービスも同様に重要である[7]。したがって，市（教育委員会）と学校は，読書センター，学習情報センターとしての学校図書館の重要性を認識し，自ら対策を講じることが求められる。その上で，必要に応じて図書コーナーや道立図書館に引き続き支援を求めていくべきであろう。図書コーナーでは市民による読み聞かせボランティアが活動している。学校図書館についても，保護者や地域住民の協力を求めながら，読み聞かせなどの読書活動や今後廃校となる学校に残される学校図書館の蔵書の整理などを行っていくことは可能ではないか。このような活動は，市民に学校図書館や読書活動が重要であるという認識を育てることにもつながるだろう。

地方自治体の財政難は，財政再建団体となった夕張市だけではなく，全国に及んでいる。財政難の中でいかに公共サービス，教育の質を保障していくかは多くの自治体の課題となっている。予算ゼロでも，人さえいればできることは沢山あることを図書コーナー職員である平井氏は筆者らに示してくれた。今なお，そしてこれからも夕張市の子どもの読書環境は厳しい状態であることに変わりはないだろうが，今後の動向にも注目していきたい。

＜注・参照文献＞

1)　平井由美子「市立夕張図書館から図書コーナーへ：市民ボランティアの力」『図書館雑誌』vol.101, no.12, 2007.12, p.798-799.

2)　鈴木浩一「「図書館がなくなる」夕張のいま」『みんなの図書館』no.362, 2007.6, p.27-34.

3)　夕張市財政再建の基本的枠組み案について（2006 年 11 月 14 日）＜http://www.city.yubari.lg.jp/contents/municipal/rebuilding/2006111402saiken.pdf＞

4)　夕張市財政再建計画書（2007 年 3 月 6 日）＜http://www.city.yubari.lg.jp/contents/municipal/rebuilding/20070306saiken.pdf＞

5)　地域別人口統計（2008 年 3 月末現在）（夕張市ホームページ）＜http://www.city.yubari.lg.jp/contents/download/pdf/2008-03.pdf＞

6)　夕張市小・中学校統合に関する方針：小・中学校の配置は各一校体制に（広報ゆうばり no.1256（2007 年 12 月））＜http://www.city.yubari.lg.jp/contents/bulletin/14.pdf＞

7)　夕張市の 65 歳以上の高齢化率は全国の市で最高の 42%に達している。読売新聞北海道支社夕張支局編著『限界自治 夕張検証』梧桐書院，2008，319p.